

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【虚構からの訣別を図るべき時期に到達したJR東日本！ シリーズ13】

JR東日本経営陣への提言 **虚構からの訣別の勇気を！その**

JR東日本は昭和62年(1987)4月に発足した。まもなく20年目を迎えることになる。そして、今や、JR東日本革マル問題、つまり「JR総連・東労組に革マル派勢力が浸透していること」と「JR総連・東労組が松崎氏およびJR革マル派の完全支配下に置かれていること」は、“疑惑”などというものではなく、正真正銘の“事実”であることは、正常な神経の持ち主である以上は、誰も否定できない状況にある。

この“厳然たる事実”を否定する者は、先ず、閣議決定を経て内閣総理大臣小泉純一郎名で出された政府公式見解、『内閣参質156第3号』(平成15年3月18日)への自らの見解を明らかにしなければならない。同「政府公式見解」について、翌3月19日付産経新聞は、<革マル派がJR総連に深く浸透>との見出しで、「政府は18日の閣議で、左翼過激派『革マル派』がJR総連やJR東労組に深く浸透しているとの認識を示す答弁書を決定した。民主党の山下八洲夫参院議員の質問趣意書に答えた。…」と報道した。また、金重・漆間・奥村と三代続いた警察庁警備局長が全く同趣旨の国会答弁を繰り返しておこなっているという事実に対する自らの見解も明らかにしなければならない。漆間氏は現警察庁長官。奥村氏は現警視総監である。

唯我独尊、無謬神話の世界で生きている左翼過激派勢力とそのシンパの者たちならばいざ知らず、**いやしくもわが国旅客鉄道輸送の基幹的大企業であるJR東日本経営の重責を担う人々が、政府の公式見解『内閣参質156第3号』(平成15年3月18日)や歴代警察庁警備局長の「不動の国会答弁」を、“デマ”だの“デッチあげ”だのと、否定することなど、絶対にあり得ないことは理の当然である。**加えて、ここ数年に亘る松崎・本部派(JR革マル左派)と福原・嶋田派(JR革マル右派)との確執、主導権争いの過程で世に出て来た松崎明編著『仇花と崇高な心』、福原福太郎著『記録「国鉄改革」前後』、嶋田邦彦編著『虚構からの訣別』、そして真打ち登場の驚愕本、谷川忍著『小説・労働組合』によって、**否応なしに「正真正銘の“事実”」に気付かされた東日本経営陣に、もはや、“虚構”の世界で生きる術“問題先送り”の余裕は残されていない。なんとすれば、「革マル派の企業組織への浸透」「革マル派による労組の完全支配」は、“国鉄改革の目的と精神への違背”であり、その放置は、“国民及び株主に対する責務の放棄”だからである。**

「小説」を辞書で引くと「作り物語」とあるが、『小説・労働組合』は単なる「作り物語」、一般普通の意味での「小説」では決してない。それは、早くから松崎氏の片腕、腹心中の腹心と目され、それ故に「JR総連委員長」の要職まで務め上げた有名人物が、「意を決して刊行した『小説に藉口した“内部告発書”』」=JR革マル派の最高指導者「松崎明」の度重なるミスリードと、数々の恣意行為及びそれにひたすら盲従するJR革マル幹部たち(いわゆる「松崎チルドレン」)の生態への怒りに満ちた“内部告発書”である。